

WINDS CAFE 259 in 原宿

PLAY

USTVOLSKAYA

ウストヴォルスカヤの叫びを聴け！！

John Cage Nocturne

Galina Ustvolskaya Duet

津田宗明 無伴奏ヴァイオリンの為の組曲

迫田圭 忘れられし二つの風景

Galina Ustvolskaya Violin Sonata

PIANO:宮阪優奈 VIOLIN:迫田圭

2018.7.22(sun) open14:00 start14:30

カーサ・モーツアルト（東京都渋谷区神宮前 1-10-23 3 階）

入場無料(投げ銭方式)

(終演後パーティーがございます。お酒食べ物等差し入れ大歓迎！)

John Cage Nocturne(1947)

4分33秒という名の作品で有名なジョン・ケージ。その著作や発言によって、彼が音楽界に与えた影響ははかり知れない。衝撃的な作品の多いケージだが、本作品は比較的おとなしい様相を呈している。

曲のはじめに *Sempre rubato* と書かれたこの曲は、規模こそ小さいものの、彼の作曲能力の高さを充分に感じ取れる。彼は自らを評して「和声の感覚の全く無い作曲家」などとのたまっていたが、それはつまらぬ謙遜に過ぎないことがよくわかる。

本作品は主催の川村龍俊様より直々にリクエストいただいたのだが、それが私のこの曲との出会いであった。世の中、どこに名曲が転がっているかはわからないものである。

Galina Ustvolskaya Duet(1964)

ガリーナ・ウストヴォルスカヤは旧ソ連生まれの作曲家。聞き馴染みの無い方も多いと思うが、一応名の知れた作曲家である。有名なエピソードとしては、ソ連一大作曲家であるドミトリー・ショスタコーヴィチの愛人であったなどと言われているが、真偽のほどはわからない。だが、それほどの濃密な関係を疑われるにも関わらず、彼女の作風はショスタコーヴィチの影響を殆ど感じられず、極めて独創的である。

本日演奏される *Duet(1964)*も、ウストヴォルスカヤの独創性が如何なく發揮された傑作である。執拗な動機の反復、トーンクラスター奏法によるピアノパートの打楽器的書法、強奏による単音が訴えかけてくる強烈なメッセージ性等といったウストヴォルスカヤ節が、楽曲の至るところにみられる。

ウストヴォルスカヤ初体験の方は、戸惑うかもしれない。私も初体験時には唖然としたのを、はっきりと覚えている。これは音楽なのか、と疑いたくなつたのだ。だが安心して欲しい。この作品は、彼女の作品の中でも有数の「聴きやすい曲」に分類される曲だ。後半演奏されるヴァイオリンソナタはこんなもんじゃない。

津田宗明 無伴奏ヴァイオリンの為の組曲(2015)

無伴奏ヴァイオリンというジャンルがある。大バッハによる「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」はあまりにも有名だ。この作品以降、一度は途絶えてしまったこのジャンルだが、バルトークという名の天才により、瞬く間にその立場を取り戻すこととなった。

バルトーク以降は非常に多くの作品が書かれることとなる。とりわけ、ここ50年程での発展はめざましく、無伴奏ヴァイオリンというジャンルは、現代音楽と呼ばれる枠組みの中で多くの可能性を提示してきた。

無伴奏ヴァイオリン等、旋律楽器における単独演奏の場合、他のジャンルよりも奏者の可能性をより試される傾向にある。本日演奏される「無伴奏ヴァイオリンの為の組曲」も例外では

ない。ただこの津田氏の作品では、今までにあまり経験のしたことがない試され方をされている感覚を覚える。例えるとするならば、しっかりと着飾って舞台に出たにも関わらず、演奏中に着ぐるみを剥がされ素っ裸にされるような感覚だろうか。これほど奏者にとって恐ろしいことは無い。だがこれほど奏者にとって喜ばしいこともなかなか無い。

そんな稀有な本作品が、より多く奏者によって、より多くの人に愛聴され続けることを願っている。

作曲者である津田宗明氏から楽曲解説をいただくことができたので、以下に添付させていただく。

2015年作曲。私の地元である小金井にて開催された美術展『Details Vol.1』のオープニング・パーティーの為に作曲された。

タイトルは「灘海/無ノ為ノ静寂ノ為ノ光」。「灘海」と題したのは当時、旅行で海岸から近い兵庫県立美術館へ『舟越桂展』を観に行き、携帯していた五線紙に作曲した事に依る。「光」とはキリスト教、「無」とは仏教を象徴する。静寂は両者の中間項である。

2015年10月には迫田圭氏によって『思想時代 Vol.6』(杉並公会堂小ホール)で初演された。彼の紡ぎ出す職人肌できめの細かい演奏が楽しみである。

(文責:津田)

迫田圭 二つの忘れられし風景(2018)

宮城県には、北村大沢地区という農村がある。その集落には、100年近くの歴史を持つバンドがあった。まだバンド等と云ったハイカラな言葉も無い時代のことであるが、それはジンタといって、サーカス小屋やお祭りでBGMを奏でるための音楽隊だ。だが、ほとんどのジンタは戦前のうちに衰退してしまい、チンドン屋に取って代えられた。

そんな旧時代の遺産であるジンタ・バンドが、あろうことかつい最近まで活動していたのだ。それも宮城県の辺境の地でだ。もちろん専業ではないが、本業である農作業の合間を見つけては、お祭りでも運動会でも、呼ばれればどこでも演奏しますといった身の軽さで活動を継続し、伝統を受け継いでいた。そのバンド名は北村大沢楽隊。YouTubeで検索すれば一発でヒットする。しかもなんとPVまであるので、ご興味ある方は是非。

そんな貴重なバンドも、数年前にクラリネット奏者でありバンドリーダーでもある渡辺喜一さんが亡くなってしまったことにより、インターネット内での活動の報告が一切途絶えてしまった。このままではいかんと思い、せめて楽曲の一部だけでも楽譜に残せたらと、作曲に踏み切った次第である。

第一楽章は、サーカスの空中ブランコのときに使われてたという、題名も出自もわからぬ曲を用いた。第二楽章には万歳マーチという、これまた題名以外の一切の出自が不明な曲をモチーフとして取り入れた。聴けばなんとなく懐かしさをおぼえるような、そんな曲になればいいなと思いながら作曲した。

Galina Ustvolskaya Sonata for violin and piano(1952)

本プログラムの中でも一際強烈な楽曲だ。もうお腹一杯かもしれないが、せっかくここまで会場にいらっしゃるのであれば、どうか最後までお聴きいただけたらと思う。

先ほどの楽曲解説に記したウストヴォルスカヤの特徴のうち、執拗な反復のみに焦点を絞って書かれたと思われる本作品は、主に1つの強烈なモチーフと2つの主題によって成り立っている。この強烈なモチーフが何かを訴えるかのごとく執拗に繰り返される。

こういう楽曲はジャンル分けしづらい。本人曰く「私の作品は何ものにも影響されていない」、確かにおっしゃる通りである。よって文章にして解説するのも至難の技だ。

だがよく観察してみると、全く影響されていないとはいさか言い過ぎの感がある。その音選びには1952年当時の空気感があり、節回しからはロシア作曲家特有の臭いのキツさがはっきりと聴き取れる。やはり間違いなくロシア出身の作曲家なんだと、リハーサルをしていて再認識させられた。しかしこの何とも言えぬ世界観や楽曲の存在感は、やはり言葉では説明しづらい。

ウストヴォルスカヤ、いかがでしたでしょうか？少しでも興味を持っていただけたなら、ピアノソナタを聴くことをお勧めしたい。それでハマったら、全曲制覇も夢ではない。そして制覇した暁には、是非とも私に全曲分のCDを貸していただけたらと思う。 （追田圭）

追田圭(Violin)

東京音楽大学大学院に給費奨学金を得て入学、修了。東京音楽大学コンクール入選、第28回市川市新人演奏家コンクール弦楽器部門最優秀賞。ロリエ弦楽四重奏団としてプロジェクトQ第10章に参加。

若手作曲家の新作初演にも数多く携わっており、サントリーサマーフェスティバル内の芥川作曲賞選考演奏会ではソリストを務める等、精力的に活動している。

現在、おけすとら・ぴとれ座コンサートマスター。東京音楽大学ピアノ伴奏科演奏助手。

宮阪優奈(Piano)

北海道出身。6歳よりピアノを始める。東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業、同大学院修士課程器楽専攻鍵盤楽器研究領域(伴奏)を首席で修了。第63回全日本学生音楽コンクール北海道大会高校の部奨励賞。2015年 MusicAlp 夏季国際音楽アカデミー・ティーニュ(フランス)にて Pascal Devoyon、村田理夏子両氏のレッスンを受講、受講生選抜演奏会に出演。第18回「万里の長城杯」国際音楽コンクールにて優秀伴奏者賞受賞。第22回フッペル鳥栖ピアノコンクール フッペル部門本選入選。

ソロ・室内楽において多数の演奏会に出演する他、伴奏ピアニストとしても多くの信頼を寄せられ全国各地で活動している。

これまでにピアノを佐藤睦美、北島公彦、橋高昌男、植田克己、佐藤俊、村田理夏子、石井克典の各氏に、伴奏法・室内楽を山洞智、土田英介、門脇大樹の各氏に師事。現在、東京音楽大学ピアノ伴奏非常勤研究員。